慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ペギーとアンティゴネー : 『政治社会評論』を中心に
Sub Title	
Author	西部, 由里子(Nishibe, Yuriko)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2005
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.10, (2005.) ,p.110- 122
JaLC DOI	
Abstract	本稿では『ジャンヌ・ダルク』の出版とほとんど同時期に大きな転機を迎えたドレフュス事件に焦点をあて、これまで『アンティゴネー』との関わりにおいて詳しく論じられることのなかった初期の論戦文について考察していきたいと思う。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20050000-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ペギーとアンティゴネー
—『政治社会評論』を中心に—

西部由里子

シャルル・ペギーが処女作『ジャンヌ・ダルク』(1897) の執筆にとりかかる前に、ソポクレスの『アンティゴネー』を度々観劇し、両作品が密接な関係を持っていることは極めて興味深い事実である。19 世紀後半のフランスにおいて、それまであまり顧みられることのなかったジャンヌ・ダルクが、国民的英雄そして祖国の守護聖女へと一気にのぼりつめた背景には、歴史学の発達によりジャンヌ・ダルク裁判の基本史料が公刊されたこと[1]、また 1920 年のジャンヌ列聖にいたる一連の動きのなかで、宗教心や愛国心をないまぜにした国民感情の高まりがあったことなどがあげられるが、アンティゴネーの復権もまた、ほぼ同時期になされている。

ギリシア悲劇の翻案ではなく、J.J.C.ドンナーがドイツ語に翻訳しメンデルスゾーンが合唱曲を付した、ソポクレスの『アンティゴネー』は、1841 年のポツダム初演で成功を博し、1844 年には P.ムーリスと A.ヴァクリーの仏語訳を用いてオデオン座で上演された[2]。異教のヒロインがヨーロッパの観客を魅了した理由を、S.フレスは「アンティゴネー神話のキリスト教化[3]」によるものと説明している。叔父である国王クレオンの命に逆らって兄ポリュネイケスの死体を埋葬するために、自らの命を捧げるテーバイの乙女は、

---

[1] 1841 年から 1849 年にかけて刊行された、Jules Quichelat による *Procès de condamnation et de réhabilitation de Jeanne d'Arc* (5 vols., Paris)。

[2] 以下、『アンティゴネー』上演の年譜的事項については、Simone Fraisse, *Le mythe d'Antigone*, Armand Colin, 1974 およびジョージ・スタイナー『アンティゴネーの変貌』(海老根宏、山本史郎訳、みすず書房、1989) を参照している。

[3] Simone Fraisse, *op.cit.*, pp.37-47 参照。

「一人の人間の魂を地獄から救うために殉教する聖女[4]」に比せられ、さらには人類の贖い主であるイエス・キリストにまで結び付けられるのである。ソポクレスの『アンティゴネー』は、1893年11月からテアトル・フランセ（コメディー・フランセーズ）で再演され大評判を呼ぶが[5]、このころからアンティゴネーとジャンヌ・ダルクの類似関係が論じられるようになったのもごく自然な成り行きと言えよう。国王クレオンに堂々と議論を挑むアンティゴネーの姿は、ルーアンの神学者たちの尋問に一歩もひけをとらずに返答したジャンヌ・ダルクに重ね合わされ、「内なる声」に忠実であろうとしたがために命を奪われた二人の乙女は人々の共感を集めた。

当時、パリのサント・バルブ学院の寄宿生となってエコール・ノルマルの受験準備をしていたペギーが通ったのも、このテアトル・フランセの公演である。校友であったタロー兄弟やフェリシアン・シャレの回想録には、すでにギリシア語のテクストを諳んじているペギーが、ジュリア・バルテ演ずるアンティゴネーに熱狂する姿が映し出されているし[6]、オルレアン中学以来の親友カミーユ・ビドーを観劇に誘う数々の書簡には、自らの感動を最愛の友と分かち合いたいという執拗なまでの熱い思いが溢れている[7]。

テアトル・フランセの『アンティゴネー』は『オイディプス王』とともに、翌年8月11日、12日に、修復されたばかりのオランジュのローマ劇場でも再演されることになり、8月1日にエコール・ノルマルに合格したペギーは、

---

[4] Paul de Saint-Victor, *Les Deux Masques*, t. II, p.192, cité in S. Fraisse *op.cit.*, p.41.

[5] この公演では、翻訳テクストはP.ムリースとA.ヴァクリーのものを改変して用いたが、合唱曲はカミーユ・サン＝サーンスが新たに作曲した。筆者が参照仏語訳のテクストはこの公演台本（*Antigone*, trad. par Paul Meurice et Auguste Vacquerie, Calmann Lévy, 1893）であり、邦訳は『アンティゴネー』（呉茂一訳、岩波文庫、1961年）に拠っている。また引用は邦訳のみとし、頁数を記した。

[6] Jérome et Jean Tharaud, *Notre cher Péguy*, Plon, 1926, t.I, pp.45-49 ; Félicien Challaye, *Péguy socialiste*, Amiot-Dumont, 1954, p.25 参照。

[7] *Lettres de Charles Péguy à Camille Bidault 1890-1899*, publiées dans *L'Amitié Charles Péguy*, 109, 2005, pp.13-64 参照。観劇に誘っているのは1894年1月3日、1月25日、2月3日、2月9日、11月13日付書簡である。

母親に旅費を捻出してもらうための「オランジュの戦い[8]」に勝ち、野外の古代劇場での観劇という念願も果たす。そして1894年11月の『アンティゴネー』上演終了直前にも、再びテアトル・フランセに足を運ぶのである。翌95年11月、ペギーは「目の疲れによる頭痛」を理由にエコール・ノルマルに休学願いを出し、『アンティゴネー』の影響を強く受けた戯曲『ジャンヌ・ダルク』の執筆を開始する[9]。

この後、ジャンヌ・ダルクは、ペギーの散文および韻文作品において繰り返し語られ、特権的な位置を与えられていくが、一方のアンティゴネーについては、これを主題にした作品は存在しないし、『アンティゴネー』からの引用もそれほど多いとはいえない。しかし、*Peguy et le monde antique* のなかでアンティゴネー関連の引用を検証したS.フレスも述べるとおり、正義と真実のための戦いとしてのドレフュス事件を生きたときも、また自らが教会を離れた最大の原因である「地獄」の教義について『相変わらず感冒について』や『ジャン・コストについて』などで考察をめぐらせたときも、そして信仰を回復した晩年に謳いあげた『エヴァ』のキリスト教的世界の中に異教の徒ハイモンとアンティゴネーをを迎え入れたときにいたるまで、アンティゴネーが常にペギーの思考に寄り添っていたことは確かであろう[10]。

本稿では『ジャンヌ・ダルク』の出版とほとんど同時期に大きな転機を迎えたドレフュス事件に焦点をあて、これまで『アンティゴネー』との関わりにおいて詳しく論じられることのなかった初期の論戦文について考察して

---

[8] *Lettres à Léon Deshairs, Feuillets de l'Amitié Charles Péguy*, 38, p.19.

[9] 両者の類似は様々な場面に見られるが、とりわけ『ジャンヌ・ダルク』冒頭において、この世から悪をなくすために自分の命を捧げようとするジャネット（ジャンヌの幼時の呼称）に対して、従順で理をわきまえている親友オーヴィエットが現実的な忠告をあたえるくだりには、ソポクレスの『アンティゴネー』冒頭のアンティゴネーとイスメーネーの対話の痕跡が明確に認められる。(Daniel Halévy, *Péguy et les Cahiers de la Quinzaine*, Grasset, 1941, p.39 ; Simone Fraisse, *Péguy et le monde antique*, Armand Colin, 1973, p.200 参照)。

[10] Simone Fraisse, *op.cit.*, pp.194-202 参照。

いきたいと思う[11]。

*　　*　　*

まず、いくつかの日付を確認しておこう[12]。ペギーがオランジュで『アンティゴネー』の公演を観たのと同じ年、1894年10月15日に、ユダヤ人将校アルフレッド・ドレフュスがドイツへのスパイ容疑で逮捕される。12月には軍法会議で有罪が確定し、95年4月にドレフュスは終身流刑地である悪魔島に到着している。それからしばらく彼のことは世間の人々から忘れ去られるが、ペギーの『ジャンヌ・ダルク』が出版された1897年12月の翌月、つまり98年1月13日に、エミール・ゾラの『私は弾劾する』が『オーロール』紙に掲載され、事件が大きく転回する。ペギーはすぐさま、『ラ・プティット・レピュブリック』紙などに掲載されたドレフュス派の抗議文署名に名を連ね、以降はノルマリアンら若き学生たちの陣頭指揮をとって、ドレフュス擁護に奔走するのである[13]。

「書かれた法」と「書かれざる法」

---

[11] ペギーがドレフュス事件中にリアルタイムで発表した論戦文は、1898年1月23日『オーロール』紙に掲載された「エミール・ゾラへの手紙」をはじめとして多く存在するが、本稿では全体に目配りしつつ、1899年2月から11月にかけて『ラ・ルヴュ・ブランシュ』誌に11回にわたり掲載され、1957年に『政治社会評論』(*Notes politiques et sociales*) という表題のもとに出版された論文集を中心に論じていきたい。また本書からの引用については、邦訳『もう一つのドレフュス事件』(大野一道訳、新評論、1981年) を一部改変しながら使用させていただき、脚注に論文名と発表年月日を記した。

[12] 事件史に関する事項については、*Péguy, Œuvres en prose complètes,* tome I, Bibliothèque de la Pléiade, 1987 の Robert Burac による年譜を参照している。

[13] 『政治社会評論』の諸論文が執筆された時期は、反再審派の大統領フェリックス・フォールの死去、再審の決定とレンヌ軍法会議、ドレフュスへの二度目の有罪判決宣告とその直後の大統領令によるドレフュス特赦などの動きに対応している。

さて、ペギーは当初からドレフュス事件の持つ劇的構造に着目していた。

> ドレフュス事件はそれ自体、初めから奇妙に劇的な価値をになっていた。また非凡な劇芸術の力をもっていた。(…) どうもうで、それでいて幼稚で陰険な一方からの攻撃によって、この事件は残虐ドラマ特有の複雑な興味をよびおこした。他方市民による堅固な防御によって、この事件は古代悲劇特有の素朴で調和のとれた美しさをもたらした[14]。

『アンティゴネー』の悲劇は、国の安定のために国王が定めた法律と、人間の良心が命ずる義務との対立が生み出すものであるが[15]、同様の構造がドレフュス事件においても認められる。軍の名誉、国の威信と秩序の維持を何より重んじる権力者に対して、正義と真実を求める自らの内なる声に従い、無実の人間を救おうとして知識人や学生、そして多くの名もない人々が立ち上がったわけである。参謀本部をクレオンとするなら、犠牲者ドレフュスは、死してもなお裏切り者と断罪され遺体の埋葬を禁じられたポリュネイケスに重ねることができるだろう。そして「彼〔呪詛され破門されたドレフュス〕を擁護するものはだれでもいっしょに呪詛され、破門される[16]」ことになるのをわかっていながら、運動に身を投じた人々に「アンティゴネーの行為を反復しているという自覚があった[17]」のも至極当然のことである。ましてや、

---

[14] *La Crise du parti socialiste et l'Affaire Dreyfus*, 1899.8.15., *Œuvres en prose complètes*, tome I, p.225. 邦訳前掲書 90 頁。

[15] 「秩序を守らぬよりひどい悪はないのだ（47 頁）」と考えるクレオンに対し、アンティゴネーは「だっても別に、お布令を出したお方がゼウスさまではなし、彼の世をおさめる神々といっしょにおいでの、正義の女神が、そうした掟を人間の世にお建てになったわけでもありません。またあなたのお布令に、そんな力があるともおもえませんでしたもの、書き記されていなくても揺ぎない神さま方がお定めの掟を、人間の身で破りすてができようなどと（34 頁）。」と「書かれざる法」を称揚する。

[16] *L'Affaire Dreyfus et la Crise du parti socialiste*, 1899.9.15., *op.cit.*, p.228. 邦訳前掲書 96 頁。

[17] Simone Fraisse, *op.cit.*, p.198.

「人類の普遍的な悪に救済をもたらすために[18]」神の召命に応え、命を差し出したジャンヌ・ダルクの生を深い共感とともに描き出したばかりのペギーにとって、ドレフュス擁護運動は、自らのキャリアや財産を賭けるに足るものであった。『政治社会評論』に収められた「世論」には次のようなくだりがある。

> 自然の法則（les lois de la nature）は、人々がそれを発見する以前から自然の法則であった。学者によって発見された法則は、教会によっても、公認の科学によっても、一般の民衆によってもまだ認知されていなかったときにも、やはり自然の法則にちがいなかった。とはいうものの、科学および人類の歴史にあって、決定的な出来事となるのは、科学的発見の人類による認知と採用である。
>
> 同様に、歴史的真実に内在する価値は、多数の者の同意によってふえることはないし、権威者のいわゆる承認によって増大するわけでもない。だが真実の外在的価値、あるいは教育的価値は、大衆および地位ある人々が、この真実を心から受け入れるとき、力強く増大するであろう[19]。

人心の反映ともなりうるし、逆に誤りを犯す可能性もある世論の功罪を明らかにし、その影響力の大きさについても言及しながらも、ペギーの眼は、権威や後ろ盾によって強力になることもなく、また弾圧や迫害によって減じることもない、自然の法である「歴史的真実」を見据えている。ドレフュス派の一少なくとも初期における一闘いは、不正な裁判を行ったことでフランスが不名誉に陥るのを防ぐために、「書かれざる法」が人々に再認識されていった過程と位置づけることができるだろう。

愛と憎しみ

---

[18] *Jeanne d'Arc* の献辞。*Œuvres poétiques complètes,* Bibliothèque de la Pléiade, 1975, p.27.

[19] *L'Opinion publique,* 1899.4.1., *Œuvres en prose complètes,* tome I, p.198. 邦訳前掲書 43 頁。

ところで、「私は、憎しみを頒けるのではなく、愛を頒けると生れついたもの（38 頁）。」という台詞は『アンティゴネー』のなかでも最もよく知られた台詞の一つではないだろうか。クレオンが憎しみによって敵味方を分け、秩序の建て直しを計ろうとするのに対して、アンティゴネーが突きつけるのは愛の論理である。彼女の反抗の根底にあるのは、クレオンへの憎しみではなく、兄ポリュネイケスへの愛情なのである。

ペギーの「兵役」にもこの台詞に共鳴する箇所がある。

> メリーヌ氏とその反動派の仲間が、おそらく想像もできないだろうことは、人間が憎しみをもたずに、ある機構を断固として攻撃しうるという事実である。とはいえ、これがまぎれもない事実であることを、認めてもらわなくてはならない。せめて想像してもらわなくてはならない。この点にわれわれの新しさがあるからである。われわれはうむことなく、戦争に対決する戦いを続けるだろう。だが憎しみにみちた戦争に対する憎悪にあふれた戦いをすることなどしない。そんなことをすれば、前とくらべても、ちっとも進歩したことにならないからだ[20]。

一見ドレフュス事件の争点からずれているように見えるが、ペギーの「アンティゴネー的」行動の原点、すなわち、あらゆる戦いは愛に貫かれたものでなければならないという思想を明確にあらわしているくだりである。インターナショナリストは軍隊を非難している、と主張してドレフュス派に対する憎しみを一つにまとめようとする反ドレフュス派の総帥ジュール・メリーヌに向かって、ペギーは、自分たちインターナショナリストは、軍隊が「侵略戦争の手段としてあるとき、つまり不正な集団的暴力装置としてあるとき、広くあらゆる軍隊を非難攻撃する[21]」という言葉を返す。軍隊とはそもそも戦争をなくすための「反軍隊（contre-armée）[22]」としてのみ存在すべきもの

---

[20] *Service militaire*, 1899.2.1., *op.cit.*, pp.190-191. 邦訳前掲書 26-27 頁。

[21] *Ibid.*, p.189. 邦訳前掲書 24 頁。

[22] *Ibid.*, p.189. 邦訳前掲書 25 頁。

であり[23]、憎しみを助長するだけの侵略戦争の手段として用いられる軍隊に対して、自分たちは「憎しみを持たずに」、しかし断固として戦い続けるというのである。

『政治社会評論』では、ドレフュス派としての発言の傍らに、アルメニア人の大虐殺やフィンランドにおけるロシアの圧政、またアフリカの国々を巡るフランスの植民地戦争に関する記述が並べられ、ペギーの一連の行動と思索が「事件」だけでなく、真実と正義が関わる問題全般に広く開かれたものであったことの証となっている。とりわけ、オスマン・トルコにおいて、1893年から96年の間に30万人以上の犠牲を出したとされるアルメニア人の大虐殺はペギーにとってはドレフュス事件の前哨戦とも言えるような出来事であった。被害の実態はヨーロッパにも伝えられていたが、フランスはヨーロッパ列強の複雑な利益の絡み合いを背景とする政治的判断により、結局首謀者であるスルタン、アブデュル・ハミト二世に対する抗議行動を起こさなかった。ペギー自身はエコール・ノルマルでスルタンを批判する請願書を回したり、『ラ・ルヴュ・ブランシュ』誌に「東方における諸事件」という論文を寄せて、フランスを覚醒させるために社会主義者たちが声をあげる必要性を説いたりしたが、大きな運動に結びつけることができず、そのときの後悔がドレフュス派闘士としての運動の原動力になったと言われているのである[24]。

「東方における諸事件」の最後に登場する、ディヤルバクル在住のフランス副領事の妻メリエ夫人は、アンティゴネーとジャンヌ・ダルクの系譜に属する人物である[25]。乳飲み子を含む4人の母親であった彼女は、虐殺を免れ

---

[23] 戦争を滅ぼすために指揮官となり戦場に赴いたジャンヌ・ダルクの生涯もまた愛に貫かれている。その内奥にキリスト教的「愛徳」を認めたペギーは、1910年に『ジャンヌ・ダルクの愛徳の神秘劇』を発表した。

[24] Robert Burac, 《Charles Péguy》, in *L'Affaire Dreyfus de A à Z*, Flammarion, 1994, p.255 参照。

[25] *A propos des affaires d'Orient*, 1897.3.15., *Œuvres en prose complètes*, tome I, pp.21-22.

安全な港湾都市へ向かおうとする 300 人のキリスト教徒に随行することを自ら申し出て、夫の職権上与えられるすべての特権を拒否し、子どもは先頭に歩かせ、自分は常に列の最後尾を歩いて危険にさらされながらも、全員を無事目的地に送り届けたとされる。この論文を執筆していたペギーの中では、生まれつつあるドレフュス擁護グループにおいて使命を果たす準備がすでに整っていたと言うことができるだろう。

「中立」の批判

前項で確認したように、アンティゴネーの行動の本質は愛にあるが、その愛を支えるものは強固な意志と非妥協性である。ポリュネイケスの遺体を共に葬ろうと誘われたとき、「私としては、あの世にいる方々にも容赦を願って、権力を手に握っている者の言うまま、やっていくつもりですの（11 頁）。」と断った妹イスメーネーは、その後意見を翻し共に死にたいと姉に懇願するが、受け入れてもらうことができない。究極の二者択一が問題になっているときに、その中間の態度などありえないからである。アンティゴネーが投げつけるのは、「だって、あなたは生きる道を、私は死ぬのを選んだのですもの（40 頁）。」という冷酷な言葉である。

また、『ジャンヌ・ダルク』において、敵方の兵士たちによる略奪や冒涜に忍従するばかりで、それに対して戦おうとしない人々は皆、普遍的な悪の共犯者（complices）なのだ[26]、とするジャネットの思考は、処刑裁判記録からは読み取れないものであるが、『アンティゴネー』を念頭におくと、理解が容易になってくるだろう。

さらに、ドレフュス事件が進展し、社会主義者陣営内部の対立が表面化してきたとき、ジュール・ゲードやポール・ラファルグ、エドゥアール・ヴァイヤンらのとる中立的な態度に、ペギーの非難の矛先は向けられる。そもそもゲードらはゾラの『私は弾劾する』の発表後に声明を出し、「このブルジョワの内部紛争のいかなる派閥にも組することはない」と労働者たちに呼びかけ、事件には関与しないという立場を表明していた。それについてペギー

---

[26] *Jeanne d'Arc*, *op.cit.*, p.36.

は次のように述べる。

> 彼ら〔ヴァイヤン、ラファルグ、ゲード〕のいわゆる中立は、行動一般におけるすべての中立と同様、いつわりのものである。人間行動のすべての哲学は、望もうと望むまいと、つぎの明白な原理に立脚する。つまり二人の人間あるいは二つの党派が争いあっているとき、中立を保つと主張する第三者は、敵対している二者のうちで勝利を収めるであろうほうを、実際には手助けすることになるという原理である[27]。

「中立は不可能[28]」と断言するペギーは、ゲードらが反ドレフュス派の共犯者にすらなっていることを指摘する。「自分を共和主義者で自由思想家だと信じている大勢の人間にとって、預言者、殉教者、王、司祭であった[29]」ゲードは、今やクレオンのような存在となり、ドレフュス派内部で新たな悲劇が生まれようとしていたわけである。

そのゲードらが、社会主義者アレクサンドル・ミルランのヴァルデック＝ルソー内閣への入閣に異議を唱えて信任投票を棄権し[30]、ミルランらを非難する宣言を、レンヌでの再審が一ヵ月後には始まるという微妙な時期に敢えて公にしたことをペギーは断罪する。

---

[27] *L'Affaire Dreyfus et la Crise du parti socialiste*, 1899.9.15., *op.cit.*, p.231. 邦訳前掲書 101 頁。

[28] *Ibid.*, p.232. 邦訳前掲書 102 頁。

[29] *La Crise du parti socialiste et l'Affaire Dreyfus*, 1899.8.15., *op.cit.*, p.222. 邦訳前掲書 83 頁。

[30] 再審推進派であったヴァルデック＝ルソーの内閣にはミルランとともに、パリ・コミューンの弾圧者として知られるガリフェ将軍が入閣を予定していたが、ゲードらはこれを不服として異議を唱えていた。しかし、彼らがとった「棄権」という行為は、ペギーによれば「中立」と同様である。つまり「投票で二つの党派がつのつきあわせ対立するとき（…）選挙人名簿に記載されているのに棄権する人は、じっさいのところ、二つの党派のうち勝利を収めるほうに好意的な意思表示をすることになる(*La Crise et le Parti socialiste*, 1899.7.15., *op.cit.*, p.211. 邦訳前掲書 62 頁)」のである。

彼らは革命の騒擾の日に、そうしていても許されるといったように平静な傍観者として日中をすごし、夕方になって決定的な瞬間がきたとき、革命兵士の背中に短刀をつきさすといった人間に似ていた。(…) 彼らは自分たちの党派を裏切るために決定的瞬間を選んだのだ。そしてはるかに重大なことに、それは人類を裏切ることでもあった[31]。

不誠実さから中立を示すことが、実は決定的状況の決定的瞬間においては取り返しのつかない裏切りに変貌するため、その境界線を見きわめなければならないのである。

奇妙なことにこの箇所は、全く対照的な内容にはなるが、10 年以上後に執筆された『クリオ、歴史と異教的魂との対話』の中で、歴史の女神クリオがアンティゴネーを羨んで語った、「アンティゴネーは、自分が死ぬことになる日の夕方に、私〔クリオ〕が数え切れないほどの夕方にする以上のことを成し遂げたのだ。アンティゴネー、若きアンティゴネーは、たった一日で自分の運命を満たしたのである[32]。」という言葉を想起させる。決定的瞬間を逃さず、自らの内なる声に従って、妥協せずに成すべきことを成すというアンティゴネーの美徳は、「事件」の後半に社会主義者たちの分裂を経験したあと、自らも社会党と袂を分かち、独力で『カイエ・ド・ラ・カンゼーヌ』を創刊、運営していくという孤独な戦いの日々のなかにおける、ペギーの行動の指針となっていたのではないだろうか。

*　　*　　*

『政治社会評論』の最後に収められた「荒廃と回復」でペギーは、ドレフュス事件によって、いくつものかけがえのない友情が失われてしまった実体

---

[31] *L'Affaire Dreyfus et la Crise du parti socialiste*, 1899.9.15., *op.cit.*, p.233. 邦訳前掲書 103 頁。

[32] *Clio, Dialogue de l'histoire et de l'âme païenne, Œuvres en prose complètes*, tome III, 1992, p.1169.

験を訥々と語る。実名は記されていないものの、その最後に描かれるのは親友であったカミーユ・ビドーである。「事件」が始まったころ、軍の獣医を務めていたビドーは、「元参謀本部付下級将校だった男」にドレフュスの有罪を教えられたという。

> そのことが、われわれの関係に完全にとどめをさしてしまった。わたしがいくら論証しても、彼は十分情報を得ている職業人が、子供時代の友人に示さなければならないといった風情のいんぎん無礼さで、耳を傾けてくれただけである。軍部の犯罪が明白になってから、彼に会ったことはない[33]。

友情の証を求めるペギーの再三の要請に対し、ビドーもまた「決定的瞬間」を逸してしまっている[34]。そしてあまりの言葉の激しさに、ビドーの遺族が公にすることを拒み、2005 年になってようやく公刊されたペギーのビドー宛書簡集の最後の一通は次の言葉で締めくくられている。

> 君に献呈した『ジャンヌ・ダルク』と『マルセル』を、パリ、キュジャス通り 17 番地のジョルジュ・ベレ書店に送り返して欲しい。僕がこの二冊の本を献呈した人物はもはや存在しない。僕が愛しているこの二冊の本が、背信行為によって、敵の手に握られていると考えるのは、僕にとってとりわけ辛いことだから[35]。

『アンティゴネー』の感興を熱気溢れる文体で繰り返し書き送り、『ジャンヌ・ダルク』執筆中もその経過を逐一報告していたペギーが、ビドーを「敵」と呼ぶまでの道のりはいかなるものであったのだろうか。『ラ・ルヴュ・ブ

---

[33] *Le Ravage et la Réparation*, 1899.11.15., *Œuvres en prose complètes*, tome I, p.272. 邦訳前掲書 140-141 頁。

[34] ペギーは 1898 年 12 月 8 日付のビドー宛書簡で、「君だけが、決定的瞬間に、僕に友情の決定的な証を示すことを拒んだ」と書いている。(*Lettres de Charles Péguy à Camille Bidault 1890-1899*, *op.cit.*, p.63).

[35] *Ibid.*, p.64.

ランシュ』に「兵役」を発表した直後の1899年2月11日に送りつけたこの手紙は、一連の論戦文掲載の間中、ペギーの脳裏に焼きついていたに違いない。

「自己を取り戻すまれにみる機会[36]」であると同時に「思いもかけない試練[37]」ともなったドレフュス事件に深く関わりながら、ペギーは、『アンティゴネー』の観劇に続く『ジャンヌ・ダルク』執筆で考察した社会主義者としての生のあり方を、現実生活のなかで追求していく。そして『カイエ・ド・ラ・カンゼーヌ』発行人としての新たな一歩を踏み出そうとするのである。

---

[36] *Associations*, 1899.5.15., *Œuvres en prose complètes*, tome I, p.202. 邦訳前掲書51頁。

[37] *Le Ravage et la Réparation*, *ibid.*, p.266. 邦訳前掲書129頁。